

歿後50年 安井曾太郎展

2005年8月6日[土]－9月25日[日]

古今東西の造形に触発されながらも現代感覚を大切に安井曾太郎は、近代洋画史にひとつの金字塔を打ち立てた画家といえるでしょう。生前から非常に高い評価を得ていた安井でしたが、昭和のはじめに彼独自の様式が確立するまでは、約15年にもおよぶ長い苦悩と模索の時期がありました。京都に生まれ、浅井忠に学んだ後、19歳でフランスに留学、パリの美術学校でも抜群の成績を修め、帰国した翌年の二科展で滞欧作44点を特別展示、華々しいデビューを飾りました。ヨーロッパの絵画を直接見ることの少なかった当時の人々は、安井の作品を通してピサロやセザンヌを理解することができましたし、日本人の画家であってもヨーロッパの画家達に引けを取らない実力を示したことは、彼等にとっても自信につながるものでした。しかし、確固たる名声とは裏腹に、安井は日本人による日本の油絵とは何かという問題に直面し、真っ向からその課題に挑むことになりました。

1929(昭和4)年の《座像》を皮切りに《金蓉》、《深井英吾氏像》など、肖像画の分野では、安井のよき理解者であった人々のネットワークを介してモデルに恵まれ、彼らの内面やその生活までもが透けて見えるほどの作品を次々と発表。風景画では、《外房風景》や《承德の喇嘛廟》、あるいは上高地の風景など、日本や中国の風景をダイナミックに処理

しました。静物画の分野でも、薔薇や果物といった素材を、それらが朽ち果てようと徹底的に観察し、画面に構成しました。

安井作品の魅力を短文で表そうとするならば、「骨格がしっかりとしているながら動きのある、いつまでも見飽きない絵」ということができるかもしれません。描かれたモチーフの角度や筆のタッチを少しでも変えてみたならば、途端にすべてのバランスが崩れてしまいそうな危険な感覚。肖像画にしても、《玉蟲先生像》や《孫》などは、あと一歩で漫画になりそうですが、この絶妙なバランス感覚が安井藝術の醍醐味といえるかもしれません。そして、さらにもうひとつ付け加えるならば、その美しい色彩も見所です。近代の洋画というと、どこか沈んだ色彩をイメージされる方もいるかもしれませんが、安井の目指した現代感覚は色彩においても意識されていることを改めて発見できることでしょう。

今年安井曾太郎歿後50年の節目にあたります。「自分はあるものを、あるがままに現わしたい。迫真的なものを描きたい。本当の自然そのものをキャンヴァスにはりつけたい。」と述べ、絵画における写実を追及しつづけた安井曾太郎の辿った画業を116点の油彩と39点の水彩・素描を通してご覧いただき、今日的視点から安井曾太郎を捉えなおす機会となれば幸いです。(Ty)

